

ロッキーのふもとで

hiromum

僕は1990年代のはじめ、仕事の関係でデンバー（コロラド、US）で数年間暮していたことがあります。

ちょうど湾岸戦争が始まる頃で、戦火のある中東でなく、アメリカ本土に行くにもかかわらず、多少の不安を感じながら渡航したのを思い出します。

デンバーはロッキーの東すそ野にあり、標高が高く、マイルハイと呼ばれている街です。マラソン選手が高地トレーニングをするボルダーも、デンバーからそう離れているわけではありません。

東海岸や西海岸のように海に面していませんが、広い大地と雄大な岩山があり、西部開拓時代の匂いが残っています。心なしか時間がゆっくりと流れ、紺碧の空や雄大なロッキーを眺めていれば、気持ちを大きく持てるように感じます。

休日には四駆を駆って広いアメリカ中西部を見てまわりました。

その様子を当時のメモや記録を見ながら、書き下ろし電子本にしてみました。

PCやIPADやiPHONEで読むことができます。

アメリカの古き良き中西部の匂い、ゆったり流れる時間、雄大なロッキーに抱かれた豊かな景色を、少しでも感じ取っていただければ嬉しい限りです。

# 出発

5月末のメモリアルデイの前に一つの仕事が終わった事もあって、心身ともにリフレッシュする為、ワイオミングにドライブすることを計画しました。

なぜワイオミングなのか？

僕のアメリカへの夢の一つは、子供の頃みた映画や漫画に発しています。

ここコロラドもそうだが、ワイオミング、モンタナ、サウスダコタ、ネブラスカなどは懐かしい西部劇の舞台に多く使われていました。

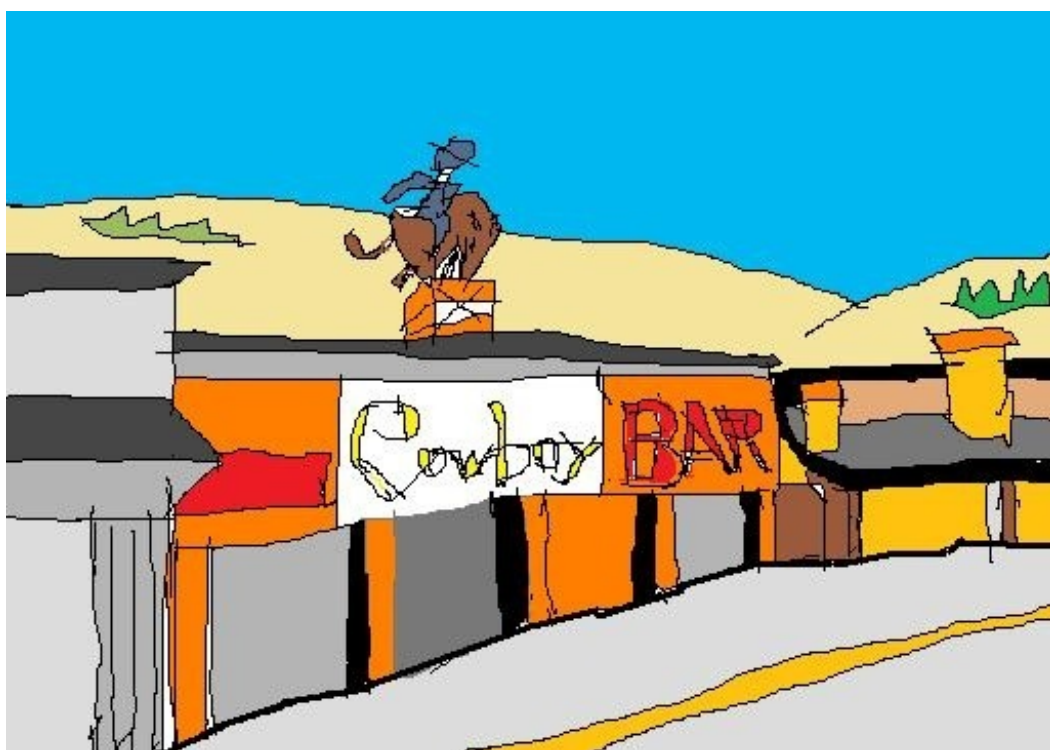
西部劇のヒーローが馬で駆けた舞台を、車で走ってみたいという願望。この子供じみた発想を満たす為4ランナーの後ろにビールとウイスキーをつみ、僕たちはデンバー近郊の田舎町ウェストミンスターを出発した。



## ララミーをとってジャクソンへ

I-25とUS287を北に走って約3時間でワイオミングの南のララミーという町にでました。僕は随分昔に”ララミー牧場”というテレビ映画があったのを思い出した。なるほどこのあたり、牧場と農場ばかりとっていい。I-80で西へ走る間、ほとんど360度見渡せる広大な土地だ。当時のテレビ映画の記憶ははっきりしないが、目の前の光景はまさに西部劇的です。

I-80のロックスプリングより北西にはしってジャクソンという町にでる。ここは後述のグランドティトンやイエローストンへの南玄関の町になっています。みやげ物やレストラン、西部劇に出てくるようなバーも見受けられます。僕は、シェリフと無法者が今にも現れそうな気がして……。バーをのぞいて一杯飲みたい気もしたが、4ランナーの運転があるのであきらめることにした。



グランドティトンといえば、名画”シェーン”の数多くの場面に雪を抱いた美しい姿を見せていました。

”シェーン”を知っている人もだんだん少なくなっているかもしれませんが……。

この広大なパークのどこで撮影されたかは定かでないが、今ここにアランラッドが馬に乗って去っていくラストシーンが蘇る。

グランドティトンにこだまする”シェーン、カムバック ---”を後ろに聞きながら、僕は4ランナーを北に進める。



バックミラー (rear view mirror)から美しいグランドティトンが消える頃、イエローストーンに到着する。

ここ火山の公園です。

噴火口に水がたまって出来たイエローストーン湖がすばらしい。

朝早くこの湖を見ると、霧がかかった対岸の山並みから顔をのぞく太陽と、湖に写る山陰は、正に絵葉書的であり絵画的である。

湖からすこし走るとイエローストーン・グランドキャニオンと滝があります。

その名のとおり黄色い岩の渓谷と激しく流れる滝と溪流であり、イエローストーンの名前のいわれが理解できます。

この流れを見ていると、僕は” 帰らざる河 ” のいかだのシーンを思い出した。この映画はもっと北のカナディアンロッキーで撮影されたそうだが、この溪流を見ていると映画のシーンにそっくりである。

。リバー・オブ・ノーリタンのメロディーをバックに、僕の視野からマリリンモンローとロバートミッチャムが小さくなって消えていった。

この公園は火口であるので、いたるところに温泉が吹き出っていて硫黄臭がいっぱいです。

ただし日本のように温泉を利用して露天風呂をつくるという発想は無いようだ。

このパークに住む野生の動物は多い。

バイソン (バッファロー)、エルク、クマ、オオカミ、リス、鳥類 . . . . .

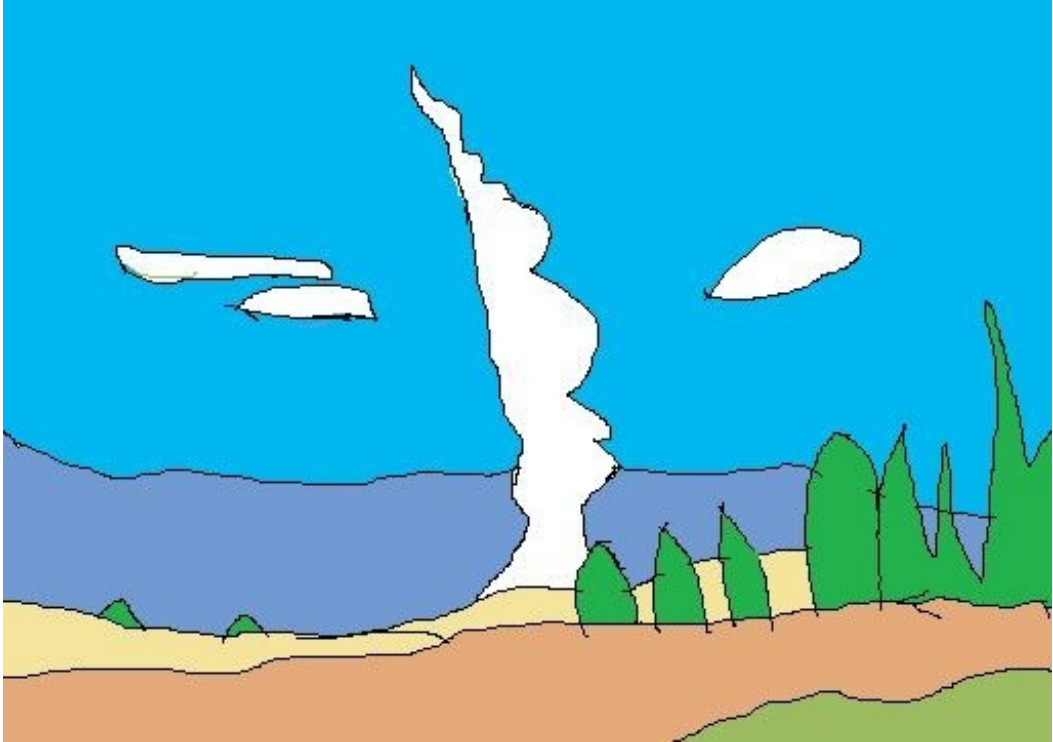
時々バイソンが道路に出てきて、車をとめる。

キャンプをはって1週間くらいのんびりと野生にかえるのも悪くは無い。

じつはこのイエローストーンは1988年に大火災がおき大半を焼きつくした。

いまでもその焼け跡が痛々しい。

しかし徐々に若い芽がふきだし、自然の力強さが感じられます。





## デビルズタワー

私たちはイエローストーンを北の出口から出てモンタナに入り、I-90にのった。

I-90を一路東へ、途中モンタナから再びワイオミングに入り、ワイオミングの最東端のサンダンスという小さい町でおる。

イエローストーンから約500マイルのサンダンス、ここからデビルズタワーまで車で約30分。

この小さな町は、デビルズタワーの為にあるようなものです。

ここも火山の火口が隆起して出来たものらしく、なだらかな丘の上に突然ニョキリと盛り上がった一見奇妙な岩山があらわれます。

周囲を30分ほどかけて歩いてみる。

上げる位置により、若干雰囲気が変わるように感じます。

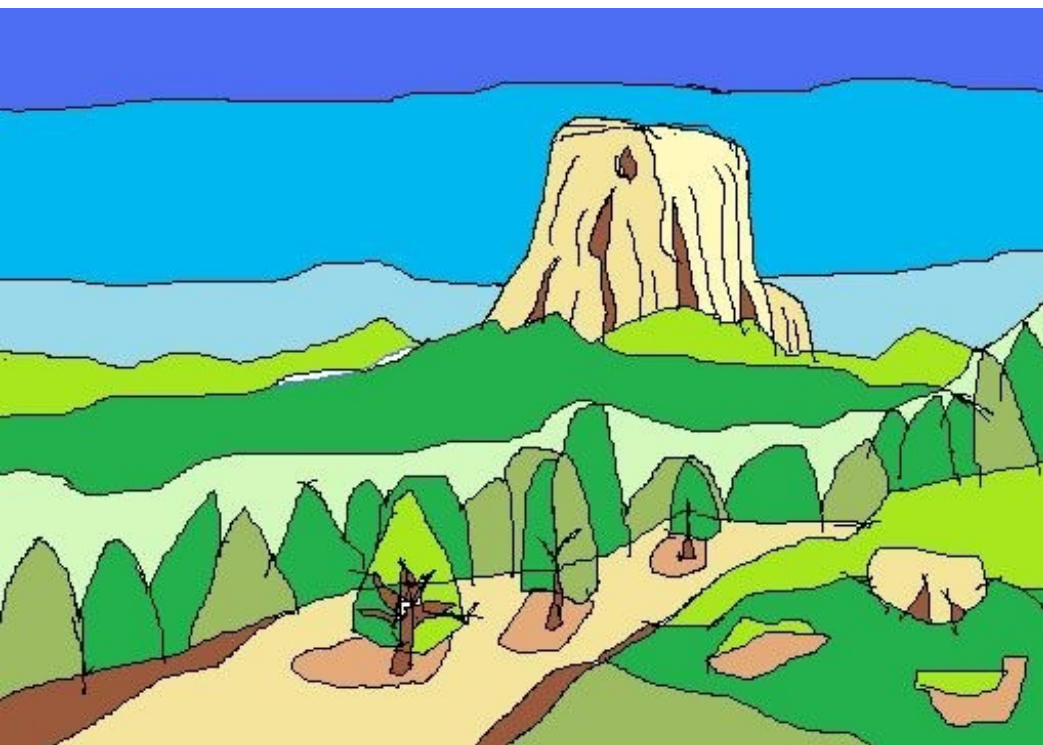
この岩山は10年程前、スピルバーグの”未知との遭遇”というSF映画でUF0が降りてきた所である。

なるほどこの奇妙な岩山にUF0がよく似合う。

岩陰から子供が好奇に満ちた目で、UF0とエイリアンを見つめていたあの画面をぼくは思い出してしまった。

しかし今、この山の周囲を歩いてみて思うのだが、大きな岩があり松の木が密集していて、とてもあの映画で見たようなUF0など降りられるような空間が見つかることが出来ない。

そこはSFの特撮ゆえか。







## マウント・ラッシュモア

デビルズタワーよりさらに東に走り、サウスダコタに入る。

サウスダコタの西側の比較的大きな町ラピッドシティのそばにマウント・ラッシュモアがあります。ワシントン、ジェファーソン、リンカーン、ルーズベルト、山に彫刻した四人の大統領の顔が見られるところといえば、

知っている人も多いでしょう。

しかし本日運悪く、濃い霧が発生し見通しが悪い。

ラピッドシティから3度アプローチしたが、大統領の顔は見えなかった。

たしかこのモニュメントは”北北西に進路をとれ！”でスクリーンに登場したのを記憶しています。

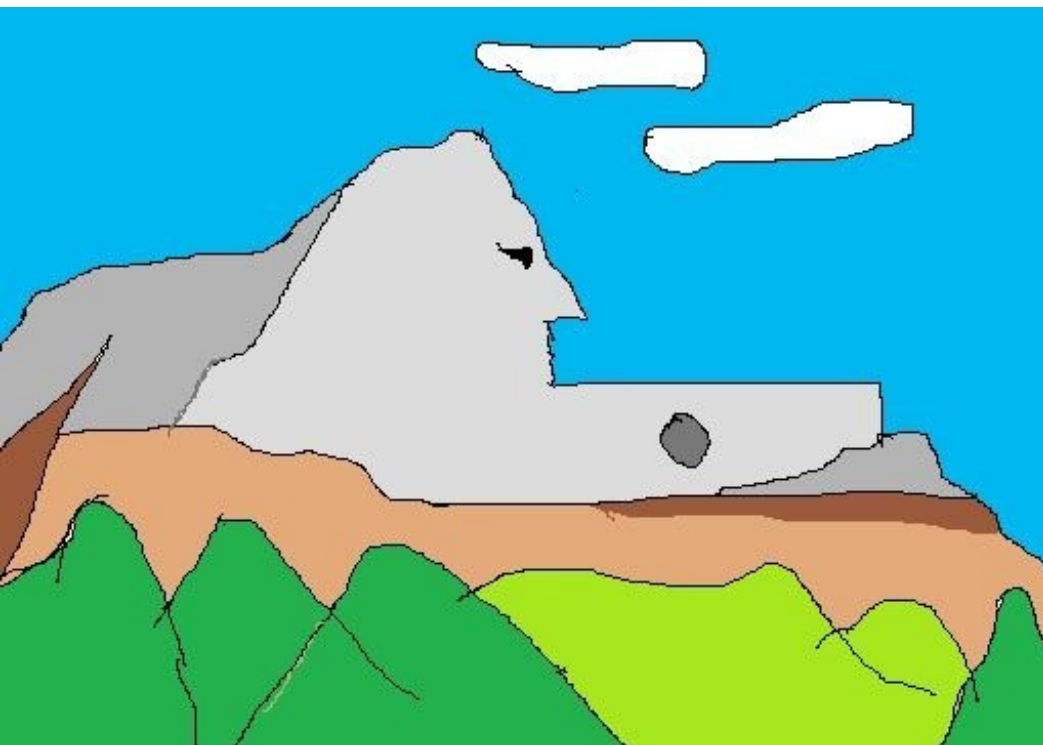


## クレイジーホース

ラッシュモアの近くに、やはり同じように山に伝説のクレイジーホース（馬に乗った勇壮なインディアン）の像を刻んでいるところがある。

このモニュメントも刻み始めて十数年経過しているそうだが、まだまだ未完成で。ここも深い霧に包まれていたが、幸運にも一瞬霧がはれた。

わずかな間隙をぬってクレイジーホースの顔を見ることができた。



さて僕たちは、イエローストーンからラピッドシティまで I-90を約500マイル走ってきた。

この I-90はさらにシカゴまで延びている。

ワイオミング、モンタナ、サウスダコタ、ネブラスカ、コロラドなどを走るこれらの道路の原点は、やはり馬に乗って開拓されたものに違いない。

西部開拓の歴史は、おおくの伝説と伝承に包まれているようだ。

開拓者のなかに、バッファロービル、カラミティジェーン、ワイルドビルヒコックなどの我々の記憶にある名前も出てくる。

。

200年前の馬や馬車の時代が、今日の車の時代につながっているのを実感します。

サウスダコタの大草原は”ダンスウィズウルブス”のなかで、ふんだんに見ることができました。

バッファローの大群が疾駆する場面はこのあたりだったのかと想像しながら、（馬では無く）車を走らせる。

やがて町に近づくと、大草原の中にポツンポツンと人家が見え始める。隣から隣へはもちろん車が必要だ。

不法な侵入者に対して、彼らはどんな安全対策を持っているのか。

こんな現実を見ると、アメリカにおける銃規制の難しさが想像できます。

## デンバーへ

---

ワイオミング、モンタナ、サウスダコタ、コロラドと四州に渡ったオールド・ウエスト・トレイルの僕たちの旅は終わった。

旅の期間、アメリカ食ばかりであったので、夕方デンバーに帰り、日本レストランで食べた寿司の味が忘れられない。僕たちのワイオミングへの旅のデータをまとめてみると、つぎのようになります。

総走行距離：2197マイル（3515 k m）

総走行時間：49時間

平均速度：45マイル/時（72 k m/時）

所要日数：5泊6日

平均走行距離：366マイル/日（586 k m/日）

200年前馬で彼らはどの程度走ったのか。

今私の手元に比較できるデータはありません。

最後に、トラブルも無く長距離走行を完遂した4ランナーに感謝し、またいつか南西部も計画しようと思いつつガスステーションに入る。

06/1993 H.M.記

グレンウッドスプリングス（コロラド）という温泉町の小高い山の上に墓地があり、当時のこの町の開拓に努力したたくさんの人々が、そこに眠っています。

その墓地の一角に、ドク・ホリディの墓があった。

この墓石は最近新しく作られたものらしく、フルハウスを示すカードと二丁の拳銃が刻まれ、いかにもガンブラーであり、ガンファイターであった彼にふさわしい。

墓石にある「彼はベッドで死んだ。」という銘文は、当時銃弾に倒れるガンファイターが多かった中で、35歳という若さで病死したとはいえ、ベッドで死ねたということは、彼にとってそれなりに幸せであったのだ、ということを感じさせてくれます。

もっともこれは現代的解釈であって、ブーツを履いたまま死ぬのが当時のガンファイター達の名誉ある死に方でもあった。

グレンウッドスプリングスのメインストリートをすこし東に入った、静かな住宅街のはずれに「ドク・ホリディの墓とパイオニア墓地」という説明文のある立て看板があり、そこから歩いて山に登る。急な山道を約20分でパイオニア墓地に到着する。その間誰にも出会わない。

一応この町の旧跡となっているから、もっと訪問者が多いのかと思ったが、実際はほとんど忘れ去られているようだ。まさか日本人の訪問者があるとは、本日はドク・ホリディも驚いていることだろう。

墓地という場所柄、誰にも出会わないというのは薄気味が悪い。明るい太陽の下であったのが、せめてもの救いであった。

立て看板のところどころ消えかかった説明文を拾い読みしてみる。ドク・ホリディは1887年5月に、このグレンウッドスプリングスにやってきた。彼は自分でも病氣（肺結核）が悪化していることを悟り、この温泉町が少しでも病氣のためによいと思ったからでしょう。

グレンウッドホテルに宿泊し、ここでも毎日ギャンブルに明け暮れていたようだ。今はそのホテルもなく、何とかいう銀行に様変わりしています。

この町に来て約6ヶ月後の1887年11月8日の朝、彼は病死した。

その前日までギャンブルをしていたという説もあれば、かなり前からベッドに伏していたという説もあります。

ともあれ病死したドクは、ホテルの従業員の好意により、手厚く葬られた。

この墓地は当時リンウッドとよばれていたが、今はパイオニア墓地と呼ばれています。

ドクはガンブラーでもあり、ガンファイターでもあった。

当時彼を狙うギャングがたくさんいて、いつも危険に身をさらしていたようだ。酒が手放せなかったのも、恐怖から逃れるためではなかったか。

病死したというニュースが流れると、彼の死体を狙うギャングが多くいたという。自分の名を高める

、格好の材料であったからでしょう。

こう考えてくると、彼の屍はこの墓地のいったいどこに葬られたのであろうか。この真実が知りたくなります。

いまの墓石は、後に作られたものであり、「このメモリアルは、この墓地のどこかに埋葬されたドク・ホリディに捧げる。」と刻まれています。

カードと拳銃を描いた新しい墓石を見ていると、だんだんミステリアスな世界に引き込まれていく。





グレンウッドスプリングスはデンバーからI-70を西へ2～3時間走ったところにあります。コロラドの西玄関グランドジャンクションと、デンバーの間に位置します。グレンウッドスプリングスとデンバーの中間位に、スキーで有名なベイルという町があるが、ここから30マイル位南に、レッドビルという小さな町があります。いまでは付近のスキーリゾートの近くの町として、にぎわっている程度であるが、このレッドビルという町は、昔は金鉱銀鉱で栄えた町なのです。

今から150年ほど前、オールドワイルドウェストでギャンブルで有名な町といえば、カンサスのドッジシティ、サウスダコタのデッドウッド、そしてコロラドのレッドビルであったといわれています。多くのアウトロー達が一攫千金を狙って、このレッドビルに集まってきていた。今この町を訪ねてみても、当時の娯楽のひとつであったオペラハウスがわずかに残っているだけで、ほとんど昔の面影はありません。

有名なOKコラルの事件後、ドク・ホリディはデンバーにやってきました。アリゾナのトムストーンからデンバーまで約900マイルはある。今でも車で走って2日はかかる。おそらく馬で10日位の長旅をしたのでしょう。（注）そして金を求めて、デンバーからこのレッドビルにもやってきた。ここでかなりの期間、ギャンブルに明け暮れていたそうです。ある日宿敵との間にいざこざがおき、ドクは相手の右腕を撃ちぬいた。とどめの一発はまわりの人々に止められて、発射しなかったようだが、これがドク・ホリディの最後のガンファイトとなった。

ところでレッドビルは、ロッキーの山中にありデンバーよりずっと標高はあります。10000 F Tを超えるのではないか。彼の病気に良い訳がない。病気が悪化していくのに気が付いたドクは、さらに西のグレンウッドスプリングスに移動し、温泉療養するつもりであったのでしょう。しかし彼の性格も、そして周りに集まる人々も静かに療養するには適していなかった。

ロッキーの山陰に、真っ赤な太陽が落ちていくのを見ながら、この古い鉱山の町レッドビルを去るとき、ドク・ホリディの墓石に刻まれた "HE DIED IN BED."が鮮明に私の脳裏に蘇った。

(OCT4/1993記 H.M.)

(注) アリゾナのトムストーン付近から、ニューメキシコを通して、デンバーまで鉄道が完成していた。おそらく馬と鉄道を併用したものと思われる。最近の映画にもそのようなシーンがあります。





## サンタフェという街

例によって突然思いついて、ニューメキシコへ車を走らせる。

11月のサンクスギビングデイの頃、デンバーは雪が降り寒い日が続いていた。

I-25の道路状況を気にしながら、もし状態が悪ければデンバーに引き返そうと思いながら、僕は南に向かって車を走らせた。

デンバーから4時間くらいのところに例のトリニダッドという古い町があるが、ここを過ぎればもうニューメキシコです。

I-25はトリニダッドの付近よりあの古道「サンタフェトレイル」と一部合流します。

もう一つのラスベガスがサンタフェの近くにあります。

このラスベガスは古道サンタフェトレイルの、いわゆる宿場町であったようだ。今でも古い歴史的な建物が保存されている。

有名なネバダの不夜城ラスベガスは、戦後ギャンブルとエンターテイメントで発展したのにくらべて、このもう一つのラスベガスはずっと先輩のようだ。

オールドタウンプラザのまわりには、19世紀の歴史的建物がならんで、マカロニウェスタン（アメリカではたしかスパゲティーウェスタンというそうだ。）のムードがただよっています。

サンタフェトレイルの宿場町であったため、カンサスのドッジシティ等から多くのアウトローがこの町にも流れ込み、数多くのガンファイトが記録されています。

その中の一つにドクホリディーとバーテンダーの対決もあります。

ビリーザキッドもこの町の刑務所に入ったことがあったようだ。

ラスベガスから25マイルほど走ったところに、サンタフェがある。

この辺の町はいわゆる南からきたスペイン人の開拓者が開いたもので、インディアン文化とスペイン文化が融合しています。

町のとおりにもスペイン語があふれ、はじめてきたサンタフェで、通りの名前を見ても頭の中に残らない。

しかもこの町の通りは、パリのように放射状になっているため、ホテルをさがすのに一苦勞であった。

サンタフェは1610年に設立され、合衆国の中でももっとも古い州都となった歴史があります。ミズリーのインディペンデンスからこのサンタフェに通じる古道は、サンタフェトレイルとよばれ1880年代は重要な商街道であった。

サンタフェトレイルはこのサンタフェが終点であったが、今でもこの町の中に、オールドサンタフェトレイルと名づけられた通りがあり、プラザの片隅にサンタフェトレイルの終点を示すモニュメントが建立されていて、昔をしのぶことができます。

アメリカで芸術活動をするには、ニューヨークかサンタフェかと言われている位だそうで、時間が許

せばもう一度訪問してみたいところのひとつです。



サンタフェから約150マイル南東のところに、フォトサムナーという小さい町があります。有名なビリーザキッドが保安官パットギャレットに射殺されたところです。どうしてもこの町が見たくて、僕はサンタフェを朝9時ごろ出発した。

US285にのって南に走り始めたが、最初に標識があったきりで走っても走っても、目安となるサインが何もでてこない。

おまけに前後に一台も車がいなくなった。

もちろん見渡す限り大草原で、他になにも見えない。

アメリカの田舎には、こんなところが多いのは充分知っているつもりである。

しかし何もサインが出てこないのは、いささか不安である。もしガス欠になればどうするのか。

そう思ってガスメーターを見ると、ますます不安が募って来た。

今ならまだ引き返すだけのガスがある。

結局、今きた道を引き返し、別の道にのって目標にむかった。

サインを見ながら、自分の位置を確認しながら進むことは出来るが、自分の位置がわからずに、むやみに進むことはもはや現代人には出来ないということでしょうか。

現代の冒険家といわれる人達が、海や山に挑戦するにしても、何らかの手段で自分の位置を確認しています。

野生の動物のような感覚を、もはや現代人は失ってしまったのか。

さてサンタフェから約3時間かかって、フォトサムナーに到着した。

想像していたとおり小さな田舎町です。

しかしその名が示すとおり砦があったようで、むかしは重要な位置にあったはずだ。

この小さな町に、ビリーザキッドのミュージアムが二つありました。

ビリーがはいっていたというジェイル、その鉄格子に「この後ろにビリーがいた。」と書いた紙が貼ってあった。

ビリーが使ったというピストルの展示もありました。

過去にビリーザキッドに関する映画は数多く作られています。

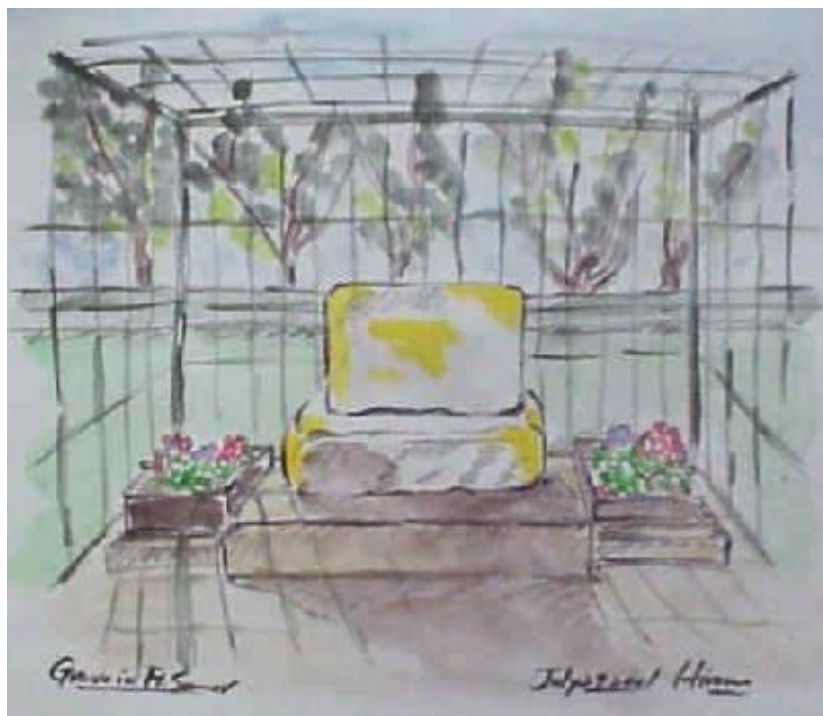
Left Handed Gun, Pat Garret and Billy The Kid, Young Gun 等はその一部です。

ビリーはジェイルを脱走し、このフォトサムナーの付近に隠れ住んでいたようです。

パットギャレットはビリーの親友であったが（パットのほうが10歳くらい年上だが）、保安官であった。

ビリー射殺の命をうけて、フォトサムナーにやってきた。

そのときのガンファイトの詳細はここでは省略するが、想像してほしい。



ミュージアムの隣に、ビリーの墓がある。

彼の墓石は過去2回、何者かによって盗まれたそうである。

そのつど新しく作り直して、今日に至っている。

盗難防止の為か、彼の墓は鉄格子に囲まれている。（もちろん天井も）

その施錠を見ていると、死後もビリーはジェイルに入っているように見える。

走行距離：1215マイル（1944 k m）

総走行時間：20.3H

平均時速：60マイル/時（96 k m/h）

（12/08/1993 記 H.M.）



## ドッジシティーへ

レイバーデイのある週末、急に思い立ってカンサスのドッジシティーにドライブすることにした。

ドッジシティーは、1872年に設立された西部の小さな町です。

しかし多くのガンマン達が、この町に立ち寄ったという話を聞き、ワイアットアープもこの町で保安官をしていたといえます。

ワイルドウェストの歴史に興味をもつ私は、とりあえずこの小さな田舎町を訪ねてみることにした。

デンバーからI-25を南へ約2時間半、プエブロという町に着く。

ここからUS50に乗り換え、東に向かう。

このUS50は、プエブロから約1時間のラユンタという町のあたりから、むかしのサンタフェトレイルと合流している。

もちろん今は舗装されていて、立派なハイウェイであるが、アーカンサス川にそって走っていて、時々砦（フォート）の跡があり、昔の荒涼たるサンタフェトレイルが偲べれます。

コロラドは西半分がロッキー山脈、東半分が平原となっているが、東隣のカンサスは地図でみてもわかるが、見渡す限り大平原となっています。

どこを走っても、ほとんど360度地平線が見渡せる。

そんな大平原を、プエブロから約5時間半走って、目的のドッジシティーに到着する。

ミズリーのインディペンデンスという町からニューメキシコのサンタフェまで、商用の街道が通っていてサンタフェトレイルとよばれていました。

ドッジシティーは、この街道の中間に存在する町であった。

当時カンサスの大草原には、多くのバッファローが群れていて、ハンター達が集まっていた。

バッファローの皮、骨、肉はサンタフェトレイルを通して東部やメキシコに流れていたのです。

やがてミズリーまで来ていた鉄道が、ドッジまで伸びますますビジネスが盛んになり、ドッジには多くの人が集まってきました。

しかし新興の町にははっきりとした法律もなく、バッファローハンター達の間で、いざこざは絶えなかった。

アウトローのいるところ、ローメンが必要である。

ワイルドビルヒコック、ワイアットアープ、バットマスターソン等ピストルの名手が保安官としてこの町にやってきたのも、そのような背景があったからでしょう。

やがて鉄道が、ドッジシティーをとおってニューメキシコのサンタフェまでのびた。

今でもサンタフェトレイルにそってAT&サンタフェ鉄道が走っています。

ドッジシティーの当時の面影は、ブートヒル博物館の中に残っています。

この博物館はワイアット通りの北側にある。

当時の町並みが、ほとんどそのままの雰囲気と保存されている。

代表的なものは、ロングブランチサルーン。

西部劇のヒーローが体でドア-を押し開け、カウンターに行き、目深にかぶった帽子の下から”ウイスキー”とかいうと、長いカウンターの奥からグラスが滑ってくるという、あの酒場です。

しかし今”ウイスキー”といってもグラスは走ってこない。

なぜかソフトドリンクしかない。

ここでダイエットコークでも飲めば、イメージが壊れるので、目で味わうだけで酒場を出た。

突然「バンバン」という銃声がある。

振り返ると今出てきたばかりのロングブランチサルーンの前で、メキシコ人風のガンマンが、屋根の上の誰かをピストルで撃ったらしい。

一人が歩道の上に倒れている。

柱の影から白いシャツの男が、メキシコガンマンを撃ったが当たらない。

お互いに数発の応酬があってから、サルーンの中から出てきたカウボーイハットの男のピストルが、メキシコガンマンを倒した。

・・・とこれがフロントストリートで行われたガンファイトショーの光景です。

ブートヒルの墓場も保存されている。

ここでは、10数人のバッファローハンターやアウトローが眠っている。

ワイアットアープに撃たれた誰々が眠る、とかいう文章が刻まれている墓もある。

その隣に、当時のジェイル（刑務所）が鉄格子をのぞかせています。

ワイアットが使ったという、あの長い銃身のピストルが保管されている。

その側に、バットマスターソンが誰かを撃ったというピストルもあります。

ところで、保安官にはいろいろなランクがある。

郡の選んだ保安官は、シェリフと呼ばれる。

町の選んだ保安官はマーシャルと呼ばれる。

マーシャルの下に副マーシャル（助手）やポリス（助手）がいる。

どうも、ワイアットアープは副マーシャルというタイトルであつたらしい。

しかし、彼の名前のついた通りが出来ているくらいで、実績により有名になったのでしょうか。

ドッジシティから約5マイル東のところに砦（フォトドッジ）がある。

というより、かつてここに砦があったという説明の記念碑がります。

もともとサンタフェトレイルという古道は主に商用に用いられたようだが、それだけに、

インディアンやアウトロー達の標的になったようで、古道にそってところどころに陸軍の砦が設けられた。

フォトドッジもその一つです。



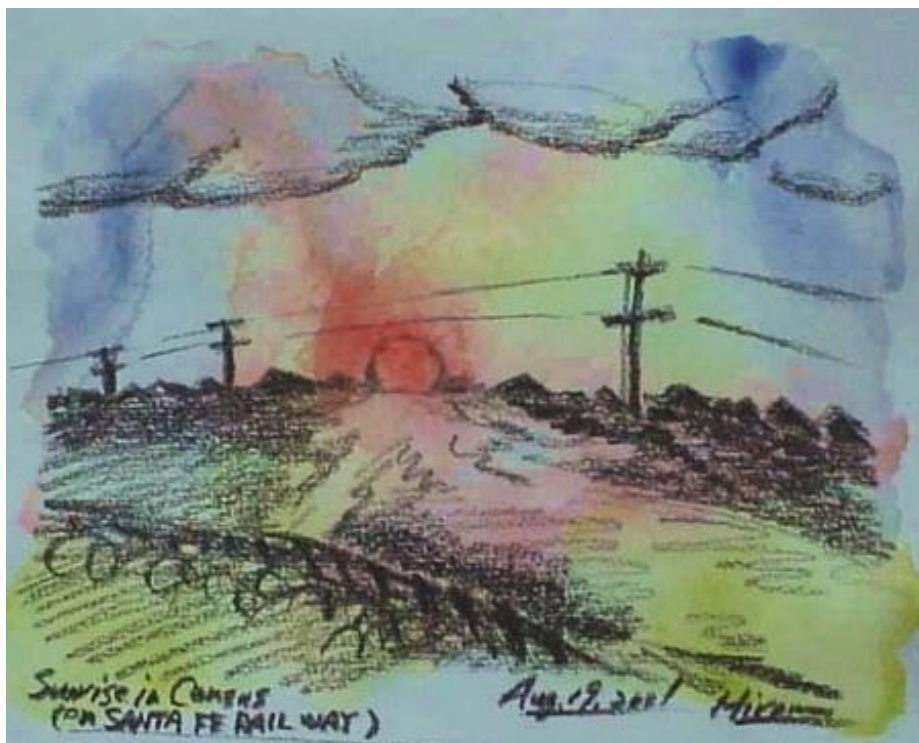
# 日の出に向かって

さてドッジシティを後ろにUS50を北東に進む。

朝早く出発したのでまだ薄暗かったが、やがて東の地平線から太陽が顔を出す絶景に出会う。

まだUS50（サンタフェトレイル）は鉄道に並走しているが、朝日と鉄道のコントラストが美しい。

サンバイザーも濃いサングラスもほとんど役に立たないくらい強烈な太陽光で、とてもまともに走れないくらいであったが、真っ赤な太陽とそれを反映して赤く輝く雲雲、それに360度に広がる地平線の光景は、それを補っても余りある美しさであった。



サンタフェトレイルの旅はどこまで走っても興味はつきないが、時間の都合もあるので、グレートバンドという小さい町から北に進路を変え、I-70にのり西に向かう。

I-70にそってヘイズ（Hays）という町があります。

ここにも陸軍の大きな砦（フォートヘイズ）があった。

じつは、その昔、このヘイズからドッジに通ずる道があり、この道を通してフォートヘイズからフォートドッジまで、物資が運ばれたという。

ヘイズの町外れに、今も砦の跡があります。

さて今回のカンサスの旅も、ほとんど終わりにちかい。

I-70をそのまま西に走れば、デンバーに通じる。

最後にもう一つだけ立ち寄ったところがある。それはカンサスの西のはずれにあるオークレイという町です。

アニーオークレイという銃の名手がいた。

「アニーよ銃をとれ」という映画があったといえば、思い出す人もいると思う。

ただし随分古い映画だから、若い人は知らないと思う。

ともあれアニーはめずらしく女性の銃の名手で、美人であった。

バッファロービルコディの率いる「ワイルドウェストショー」の一員として、全米をまわり、またヨーロッパまで遠征したということは私も知っていました。

実はこのオークレイという西部の小さい町は、この有名なアニーオークレイと関係があるのかなあと考えて立ち寄ってみたのです。

案の定、アニーオークレイという名のホテルがあるし、地元のミュージアム（実は休日でクローズしていたが）の前にも、彼女の写真がでていた。

やはりアニーの出生に関する町か、長く住んだ町なのでしょう。

彼女は銃の名手であったが、他のガンファイターのように人を殺すのではなく、自分の技術を他人に見せる「ショー」の道を歩んだのです。

賢明なことだと思う。

カンサスの旅は終わった。

山も海もない大平原の連続に、少々疲れ気味である。

コロラドに入って、ロッキーが見え出すとなぜかほっとする。

やはり人間の生活には、山や海が必要なのか。

特に私のように山や海を見慣れている日本人には・・・。

総走行距離：931マイル（1490km）

走行時間：18時間

平均速度：52マイル/時（83km/時）

（Sep. 9, 1993 H.M. 記）

# 1993USシニア・オープンゴルフを観戦して

1. 1993年のUSシニアオープンゴルフを僕は目の前で見える機会を得た。  
今年デンバーの近郊、エングルウッドの名門チェリーヒルズC.C.で行われる。僕はゴルフが好きでながくプレーしていますが、実際にプロのトーナメントを現場で見える機会はなかった。  
それがいきなりUSシニアオープンだ。
2. かつて黄金期を築いた（いや今も立派にレギュラーツアに参戦している選手も多いが）名プレイヤーの名前がボードに出ている。  
アーノルドパーマー、ゲーリープレイヤー、ジャックニクラス、リートレビノ、チチロドリゲス、オービルムーディ、レイフロイド、トムワイスコフ等々....  
そんな中にただ一人日本の青木 功プロの名前がある。
3. 第一ラウンド、#9ホールでパッティングを見る。  
まずゲーリープレイヤーが来る。テレビで見るように表情ははっきりととらえられないが、あの精悍な雰囲気はそのままである。  
チチがバーディーチャンスにつけたが、3メートルあまりのフックラインがはずれた。  
すこし遅れてトレビノがくる。2オンできずにグリーン左手前からの難しいアプローチを寄せきれず、パットが入らずボギー。
4. ニクラスと同じ組で青木プロがグリーンに上がって来る。  
ニクラスはグリーン横からうまく寄せてパー。  
7M位の青木のパットはカップを1M位オーバー、なんなく返しを沈めてパー。  
#9まで青木2オーバー、ニクラス1アンダー。  
初めて目の前で見ると、プロのトーナメントだが、パッティングのうまさはさすがである。
5. ティーショットを見るため隣の#10ティーまで走る。  
人気パーティーだけにギャラリーが厚くティーボックスを取り囲んでいて、よく見えない。  
青木プロのドライバーショットは、本人は納得していない様子だったが、まずまずのところ飛んだようだ。
6. 青木プロの真髓を見たのは#18グリーンである。  
ニクラス-2、青木EVENで#18グリーンにあがって来た。  
青木の2ndショットはピン奥カラーまでころがった。ピンまで約8M、下りのスライスライン、しかも2段気味になっていてピン周辺から特に早い。  
入念にラインを読んでいた青木プロのあの独特のスタイルから打ち出された（本当に打つという感じ）ボールは「あっ強すぎる！」という感じを乗せながら、見事にスライスラインを描いてピンにあたりホールに消えた。  
ギャラリーからは「ナイスパット」「ビューティフル」「オーグレート」などの喚声。  
ニクラスと握手して第一ラウンドを終えた青木プロの後ろ姿に、世界の強豪を相手に戦ってきたプロの真髓を見た思いがした。
7. 2日目青木は68をマークしトータル4アンダーとし、チチロドリゲス5アンダーに次ぐ2位に浮上する。  
テレビのインタヴューにも登場し「ジャックニクラスと同じパーティーで非常にリラックスできた。」と言って

いる。

8. ゴルフは何が起きるかわからない。

2日目まで好調だった青木のパットが突然入らなくなったようだ。

第3ラウンドはわたしは詳しくは見ていないが、5オーバーとしトータル1オーバーで9位まで落ちたのを見ると、青木プロの得意のパットに微妙な狂いが生じたのが想像できます。

9. 最終日、さすがに会場は華やいでいる。

テレビで見えてもよかったが、私は名プレイヤー達をもう一度目のあたりに見たくて、チェリーヒルズC.C.にやってきました。

10. 最終日にかかる選手たちは、それぞれの思いを秘めて練習レンジで調整に余念がない。

ゲイリープレイヤーがいた。

トレビノがいた。

チチロドリゲスがいた。ジムコルバートもいた。

ゲイリープレイヤーの後ろで打球を見る。

一球一球がすばらしい弾道を描いて真っ直ぐ飛んでいく。

僕がゴルフを始めたころ、初めて読んだプレイヤーの本の中にあつたイラストと、ほとんど変わらない本物が目の前にいる。

11. すこし遅れてレンジに入ってきた青木プロの後ろに立ってみる。

やわらかいホームから、鋭いボールがはじき出される。

トレビノもそうだが、青木のショートアイアンはボールを打つというより、ボールを操るという感じだ。

こんな練習も見せてくれた。

ディボットの中にボールを置き、その上を2, 3回かるくクラブヘッドでたたいてから、ロングアイアンで打っていく。芝の上にあるのと同じように鋭い弾道でボールは飛んでいく。

これには驚くと同時にあきれた。

12. 練習グリーンにて

「あれが青木か？」隣の中年アメリカ人が声をかけてくる。

「そうだ。」と僕は答える。

「ブレードがあがってちょっと変わったスタイルだな。」

「そうだ。でもグッドプレイヤーだよ。」

「うん、知ってるよ。」

青木プロもUSツアーでかなり有名になってきた。

彼が1980年のUSオープンでニクラスと熱戦の末に惜敗したことを、デンバーポストは報じている。

13. 青木とストックトンのティーオフは間もなくである。

本日は18ホールこの組について回る予定なので、ホットドッグとコーヒーで急いで腹ごしらえをする。

さあいよいよ最終ラウンドのスタートだ。

#1ホール 346ヤード パー4

青木プロ大事をとってアイアンでティーショット。

しかしこのショット思ったより右にいきすぎたようだ。



青木プロの表情もさえない。

14. セカンドショット早くもトラブル。

ストリームをまたいだスタンスで、ボールが見えない程のラフからのショット、しかも木の間をぬって・・・。  
このショットグリーン奥にこぼれたがナイスリカバリー。

第3打はミス（だと思ふ）して2.5～3mの下りのパットを残す。

しかしさすがパットの名手青木、これを慎重にねじ込んでパーをセイブする。

思わず拍手喝采。

15. #1に象徴されたように、本日の青木プロもうひとつさえない。

その後ボギーがでてオーバーパーを重ねる。

バンカーやラフからのリカバリー、さすが名手を思わせるが、本日もパットが決まらない。

パーセイブを逃すし、バーディーパットがはずれるという悪循環が続く。

パートナーのデイブストックトンもボギーを連発し、フロントナインを終わった時点で上位進出は絶望的となった。

16. 僕が青木ーストックトンの組についている間に、トムワイスコフがスコアーを伸ばしていた。

1アンダーでスタートした彼はみるみるバーディーを決め5アンダーにしている。

優勝争いは最終組のニクラス5アンダー、ダグラス4アンダー、それにワイスコフ、このあたりに絞られてきた。

17. 青木は本日5オーバー、トータル6オーバーで72ホール目を終えた。

#18のグリーンの周りはギャラリーが取り囲み、外からはほとんど見えない。

フロイドーミラーバーバー組が来る。

チチロドリゲスーワイスコフ組が来る。

ワイスコフは一時6アンダーとしていたが#18グリーンにあがって来たときは5アンダーである。バーディー決まらず、

そのままフィニッシュ。

かつての「恐怖のトム」はシニアになって円熟味が加わったようだ。

18. ニクラスは#16バーディーとし6アンダーのまま#18グリーンにあがって来た。

ジャックニクラスの人気はすごい。

ゴルフで主役は常に「優勝者」である。他はすべて脇役となってしまう。

優勝がニクラスとなるとその盛り上がりの2倍3倍となってしまう。

グリーン周りはギャラリーに囲まれ、ニクラスの姿をかいま見るのが精一杯であった。

19. 1993年のUSシニアオープンの暑い戦いは終わった。

終わってみれば、落ち着くところに落ち着いた、ということかもしれません。

しかしこれだけの名プレイヤーが集まっているのである。

誰がかってもおかしくはない。

心、技、体を4日間うまくコントロールできたものが上位を占めることが出来る。

これはプロにとっても至難の事である。

さらに勝つ為には「勝利の女神の微笑み」が必要なのです。

20. 最終結果 (略記)

Jack Nicklaus 278

Tom Weiskoph 279

Kermit Zariey 280

Chi Chi Rodriguez 281

Dale Douglase 281

Miller Barber 282

Tommy Aycock 283

Ray Floyd 283

Lee Trevino 284

\*\*\*\*\*

Gary Player 289

\*\*\*\*\*

Isao Aoki 290

\*\*\*\*\*

(07/12/1993 記 H.M.)



**2/28/1993**ハイランドヒルブルーコース（9ホール）、僕は友人（日系アメリカ人）と一緒にプレイする。

（他にアメリカ人二人を加えた4サム）

10時**AM**スタート。ちょうど霜がとけてブラウンとグリーンの混じった芝が美しい。

#1： 558ヤード、パー5

ドライバー、ストレートからややフェード、まずまずのショット。

スプーンのセカンドはトップ気味でスライス。距離不足でグリーンまで残り**165**~170ヤード位のところ、

フェアウェイやや右サイド。

そこから4アイアンでグリーンをねらう。まづまづのショットだが上りの分ショートしてグリーン手前エッジ。

そこからパターでよせて1パットのパー。

すべり出し好調です。

#2： 409ヤード、パー4

一週間前から改造しているこのスイングでは、ドロワーが出るはずである。

しかし前のホールもこのホールもドロワーが出ない。このホール、ストレートのボールでフェアウェイセンター

をキープ。

残り165ヤードのかなりの上り、フラッグは前の丘に登らないと見えない。フラッグの右の立ち木をねらって

3アイアンでショット、ボールはやや右に出て左にもどらず、グリーン右ラフにとまる。

そこから7アイアンでランニングアプローチ、やや弱くグリーンエッジ。

3メートルを2パットのボギー。

#3： 372ヤード、パー4

右側に大きな木とクリークのあるホール。

ドライバーはナイスショット、フェアウェイ中央、残り145ヤード位まではこぶ。

7アイアンのショットはややダフリながらも、グリーン左にオン。

下りのスライスラインを50センチによせてパー。

ナイスプレイだよ。

#4： 382ヤード、パー4

右側立ち木がいっぱい。ここに入れると木がじゃまをして、グリーンがねらえないことが多い。

ドライバーナイスショットでフェアウェイやや右サイド、残り140~150ヤード、グリーンが

きれいに見渡せます。

しかしその分力が入ったのか、アイアンショットをミスしてグリーン手前20ヤードのラフにとまる。

そこからよせワンを意識しすぎてグリーンエッジにショート、残り4~5mある。

ここからのパターを使ってのよせがカップインし、思いもよらなかったパーをひろう。

本日はついている。

#5 : 148ヤード、パー3

唯一のショートホール。

左からグリーン手前にかぶる池がプレッシャーとなる。

6アイアンでピンの右をねらってショット。体重がやや右に残ったがターフが取れてストレートなショット。

グリーン右サイドにオン。

フックラインのパットがやや弱かったが、50cmによりパー。

#6 : 353ヤード、パー4

池越えの第一打、グッドショットでフェアウェイ中央。

最近ドライバーは池越えを気にしないで打てるようになった。しかしミドルアイアンは池やクリーク越えになるとミスすることが多い。

残り打ち上げの160ヤード、4アイアンで打つが、スイートスポットがはずれてグリーン手前。そこからかなり

上りの二段グリーン上にあるピンを9アイアンのピッチ&ランでねらう。

ややトップ気味に入ったが、その分ランを稼げて結果オーライ、1パットのパーをひろう。

#7 : 347ヤード、パー4

ドライバー好調、腰の切れと腕の振りがうまくあい、いつもより距離が出ている感じ。

しかし6アイアンのセカンドショットをミスしてグリーン右手前のラフ。

そこから2.5mによせたが、フックラインがフックせず、入らずのボギーをたたく。

これで2オーバー。

なんとなく安心するが、これ以上ボギーをたたきたくない気も強くなる。

これがプレッシャーだ！

#8 : 548ヤード、パー5

二つ目のロングホール。

このホールハンディキャップ1でグリーン前の池が第三打にプレッシャーをかける。

ティーボックスからは、雪を抱いたロッキーが望め雄大なホールである。

相変わらずドライバー好調、スプーンはやや右目に出たが、第三打を池越えの第三打を6アイアンでグリーン下側に3オン、ピンから7~8m。

切り取った芝でディボットをうずめるのが楽しい。

ファーストパットはフックライン読みきれず、ホール左1m、この1mを決めてパーをとる。  
プレッシャーにもめげずナイスプレイがまだ続いている。

#9: 381ヤード、パー4

最終ホール。

右側は木がスタイミーになる。いつもはフェアウェイ左側をねらう。

本日もやや左をねらったが、スライスしたボールは右側木の中へ。

左をねらったのが、体を開いた形になって、スライスとなったようだ。

残り150~160ヤード、前の木の左をねらってショット、あまりいいショットではなかったが  
計算どうりスライスがかかって、グリーン前30ヤードの地点へ。

しかしピッチングウェッジでのよせ、ミスではないが距離感があわずショート、8mのパットはピン  
奥1mへ。

スライスと読んだラインは曲がりきらず痛恨のダブルボギー

これでトータル4オーバーの41.

この9ホールはパー37ゆえ、私のいつもの計算では $41/37 = 1.108$  /パー

したがってパー72に換算すると $1.108 \times 72 = 79.8$ ということになる。

しかしこのあと9ホールを続けてまわったとして、このようなプレイが継続できたかといえはなは  
だ疑問である。

どこかで大崩して、90をきるのが精一杯というところであろうか。

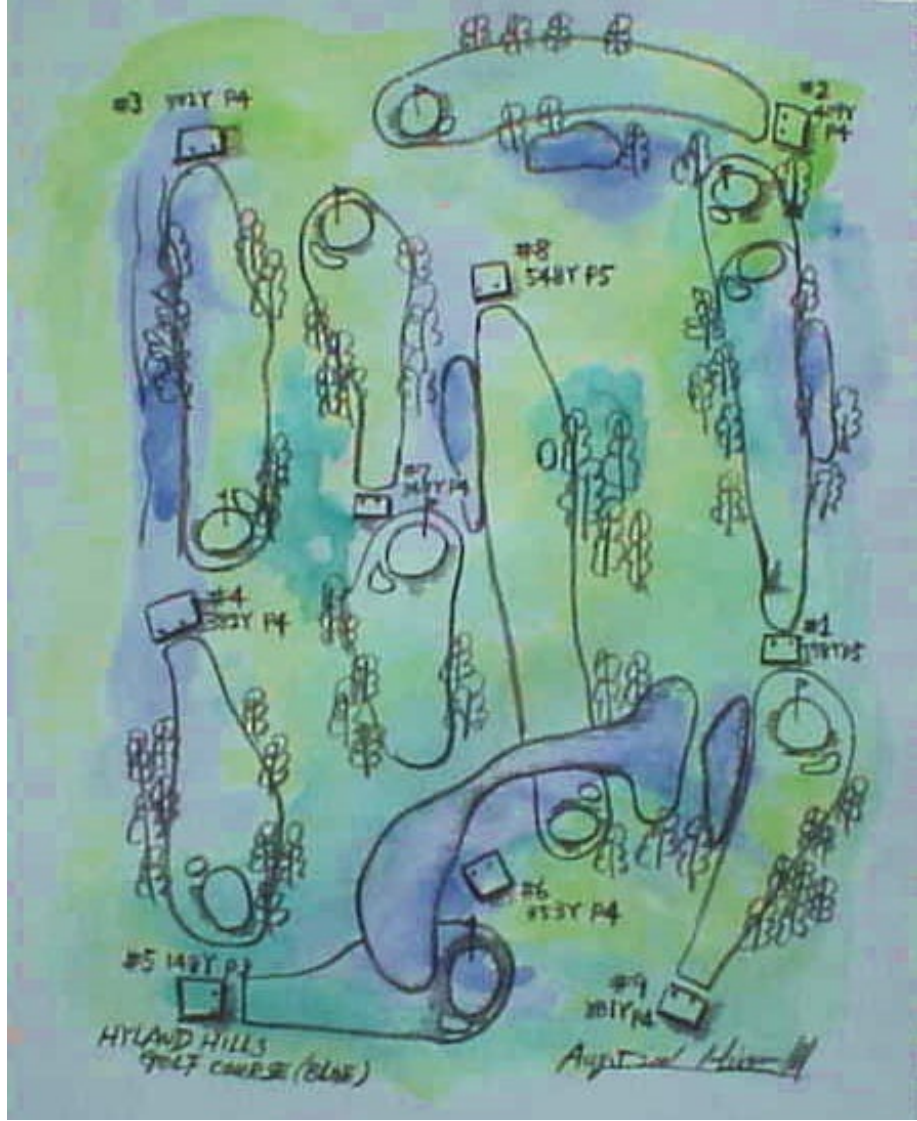
ともあれ、今後への期待のもてる9ホールのプレイであった。

ちなみにパットは15で、これが好成績の一つの原因である。

(2/28/1993 記 H.M.)

このコースはデンバー近郊のウェストミンスター市にあるパブリックコースで18ホールのゴールド  
ドコースと

9ホールのブルーコースがあります。



デンバーとその衛星都市の人口は当時約180万人と言われたいました。

その構成は白人系75%、ヒスパニック系13%、黒人系10%、アジア系2%、その中で日系人約10000人といわれていました。その日系人が集まってデンバー仏教協会というものを作っていました。残念ながら、僕は彼らが具体的にどんな活動をしていたのかは知らなかった。

本来の宗教活動は勿論だが、いろんな文化体育のクラブがあって、それぞれがグループをつくって活動をしていたらしい。

DBACゴルフトーナメントは、彼らの中でゴルフの好きな連中が集まって、一年単位で毎週土曜日デンバー近郊のゴルフ場をプレイするトーナメントでした。

四月中旬から始まり、九月末にはオフになります。

ここに集まる日系人は様々です。

二世三世の人は多いが、若い人はもう四世になるのでしょうか。

顔は日本人ですが、言葉はほとんど日本語は通じない。姓はスズキとか、ヤマグチとか日本名ですが、名前はジョンとかロンとかアメリカ名が多かった。

職業もいろいろで弁護士や医者もいれば、会社の経営者もいる。勿論いわゆるサラリーマンも多かった。

僕は週に一度、彼らとゴルフ場で顔を合わせるだけで、別に彼らのゴルフ以外のことは知らないし、知る必要もなかった。ハンディは、4を筆頭に40までバラエティに富んでいました。(なぜか36以上のHCも結構多い。)

結局19戦して(最後は雷雨と雹のため中止となったが)、平均スコアは95、ハンディは23からいろいろ調整されて21ということになった。僕としては、少し不本意だったが、あと3つつか4つつ沈めたかったが、やはりトーナメントということでもあり、プレッシャーがかかるし、まあこんなとこかなあとも思った。

このトーナメントのコースとスコアは別表をご覧ください。

コースはいずれもデンバー近郊で、ロッキーのふもとです。

参考までにこのトーナメント以外に、ハイランドヒルズ(僕が住んでいたところの近くのパブリックコース)をプレイした結果は、当時の記録によれば1993年平均90.4、1992年平均90.6、1991年平均94.4で進歩の跡が見えますが、僕にとっては年平均で90を切ることが、大きな壁であったようです。

「もっとやれるかな」「もっとやれたかな」という思いはあるが、データは真実を物語っています。

1993 DBAC GOLF TOURNAMENT

NO.	DATE	COURSE	IN	OUT	GROSS	PAR	PUT	GROSS /PAR	G/P x 72	COMENT
1	4.17	MEADOW HILL	49	48	97	70	37			
2	4.24	TWIN PEAKS	46	44	90	70	39			
3	5.01	RIVERDALE	49	48	97	71	40			
4	5.08	LOVELAND	44	50	94	72	36			
5	5.15	WILLS CASE	47	45	92	72	37			
6	5.22	INDIAN TREE	47	48	95	70	37			
7	6.05	AURORA HULLS	48	49	97	72	41			
8	6.19	ENGLE WOOD	48	46	94	72	41			
9	6.28	MATIANA BUTTE	53	47	100	72	40			
10	7.09	PATTY JEWETT	46	43	89	72	33			
11	7.17	LOVERLAND	46	47	93	72	40			
12	7.24	CITY PARK	43	50	93	72	34			
13	7.31	HIGHLAND HILL GOLD	47	52	99	71	37			
14	8.07	RIVERDALE	50	46	96	71	36			
15	8.14	J.F.KENNEDY	46	49	95	72	37			
16	8.21	PATTY JEWETT	47	50	97	72	38			
17	8.28	BOOMERANG LINKS	47	47	94	72	43			
18	9.11	FLATIRONS	51	40	91	70	34			
19	9.18	MEADOW HILL	0	0	0	0	0			NO GAME
		TOTAL	854	849	1703	1285	680	1.33	95.4	



## ゴルフをやめるとき

先日テレビで「レジェンド・オブ・ゴルフ・・・・」とかいう番組が放映されていた。作家の氏がゴルフの歴史を追って、世界の有名ゴルフコースをまわるという企画でした。セントアンドリュースからアイラ島、そしてフロリダから西海岸ペブルビーチなど・・・。

氏はゴルフへの見識も高く、ゴルフに関する著書も多く、自身もかなりのローハンディのゴルファーです。

ゴルフは子供から高齢者まで、幅広くプレイ出来るスポーツです。

ゴルフの約束をした時、天候が悪くなってもとりあえずはコースまで行って判断すると彼は言っています。

それはゴルフが出来る間は、真面目に真摯に向き合いたいという気持ちからでしょう。

しかしいつかはやめなければいけない時が来る。

年齢的にあるいは体力的に、自分で納得がいかなかったり、まわりに迷惑をかけるようになれば、それはやめる時だ・・・と彼は言っています。

スコットランドのセントアンドリュースはゴルフの聖地として、よく知られています。

このコースは広く一般に開放されていて、市民は気軽にプレイ出来るそうです。

欧米ではこのようなパブリックなコースが多く、一般市民とコースとの距離は非常に近い感じがします。

僕が住んでいたデンバー近郊も、パブリックコースが多く、市民が家族でプレイしている姿を普通に見ることが出来ました。ゴルフの環境が整い裾野が広い感じを受けます。

それはたぶんゴルフの歴史が関係しているのですが、国土の状況も関連しているように思います。

氏のオールドコースでのプレイは、アマチュアゴルファーとしては最高のように見えました。

アマチュアはまずしっかりと仕事をしてからゴルフをする。いいときも悪いときもあるが、しっかりと仕事をしたから今日はよかったのでしょうということで自分を納得させていた。

それでもいつかはゴルフをやめなければいけない時が来る。

僕は今ゴルフをプレイしていません。

もう10年近くクラブを握っていない。

やめたと決めてしまったわけではないが、なんとなくかつてのように熱中できなくなってしまった。

それは年齢的なものかもしれない。体力的なことかもしれない。あるいは環境のせいかもしれない。

とにかくあまり真剣に考えることもなく、なんとなくクラブを置いてしまった。

いつかは来るクラブを置かなければいけない重要な日を、僕は何となく迎え、そしてかなりの年月が過ぎてしまった。

(09/2010 hm記)



僕がデンバーを離れてからもう17年近くも経ってしまいました。

当時はデジカメなどもなく、スケッチやスナップ写真やメモなどばらばらになっていたのですが、そのうちホームページなど作るようになりそこにアップしたりしていました。

時は流れて、時代はすすんで、電子本（電子書籍、電書）なるものも出てきました。

そして僕もとうとう古希を迎える年代になってしまいました。

そこで今回関連コンテンツを見直し、古希記念の電子本という形でまとめてみました。

日本と比べ歴史の浅いアメリカですが、それでもネイティブアメリカンを含めれば、大きく歴史をさかのぼることができます。

そんな歴史があのかのロッキーのふもとに広がっています。

さてこの電子本を読んでいただいた皆さん、

ロッキーの雄大さ、奥深さを感じていただけましたでしょうか？